

信毎俳壇 今井聖選

- 春浅し八十路の兄はツナギ着て
(小諸市) 佐藤ゆきな
- 種蒔きて余生いよいよ楽しまん
(中野市) 田川 寿男
- 彼方此方に灯り無き家臍なる
(飯綱町) 仲俣 一重
- 剪定の脚立に跨ぐ浅間山
(長野市) 荻原 宏祐
- 一人者力を込めてくしやみする
(松川村) 岡 豊村
- 靴底に唾やはらかし犬ふぶり
(松本市) 伊藤 和夫
- 春の風麻痺せし臍解くことし
(辰野町) 矢島あさ子
- 凍み豆腐矢鳥の爺の曲がり指
(佐久市) 吉岡 道明
- 春雷のコンピニニ買ふ点鼻薬
(長野市) 宮沢 朝子
- 啓蟄や老に早まる髭の伸び
(佐久市) 西田 和彦
- 佳作
昼酒に集ふ八十路や雪掻き後
(長野市) 青木 武明
- 齒科の椅子座るたび梅ほろびぬ
(飯綱町) 小林 紀子

一句目、80代のツナギはおしゃれで現役ばりばり。なんてすてきな兄貴。名優クリント・イーストウッドみたいだ。二句目、余生と言いながらほんとうに楽しそうに園芸に精を出す。理想的な生き方に思える。三句目、空家が増えてきた状況を灯りのない窓に象徴させる手腕はなかなかのもの。俳句表現に熟達した方だ。四句目、遠近法と視点の設定が見事。空間をきっちり描き切っている。

選評

神野 紗希 選

- 倒れたる野仏起す雪解原
(飯綱町) 坂井 寿男
- 繭雛を供ふ結愛ちゃん七回忌
(須坂市) 小山 重征
- バオバブの実の擦れ落つ砂嵐
(小諸市) 加藤 陽介
- 蒸籠から四川包子梅日和
(松本市) 伊藤 和夫
- 陽炎に人魚とならん捨て人形
(安曇野市) 小坂りり子
- 勝算の有る無し雪を殴る殴る
(塩尻市) 神戸 千寛
- シエルターにすでに二歳おぼろ月
(松本市) 小林 幸平
- ゆびぎりの大方時効鳥雲に
(長野市) 荻原 宏祐
- 明け方の子猫五匹も賣る夢
(長野市) 清水美佐子
- おとっさんのおとっさんのはいはいはなにあに
(中野市) 風間 一乃
- 佳作
図書館の花の本借り雪の道
(小諸市) 前島 良
- 寒天釜の噴くいき荒く星原へ
(茅野市) 小平 訓男

一句目、雪が解けて現れた野仏をよいしょと抱き起こす。優しさと敬虔とが、野の雪解の光に溶けてゆく。二句目、当時5歳の船戸結愛ちゃんが虐待により衰弱死したのは3月2日、雛祭り前日だった。繊細な繭雛に命の尊さを思い出す。三句目、バオバブの実と砂嵐、異土の壮大な自然を夢想した。四句目、外国語のリズムを取り入れるのも楽しい。こんな言葉も俳句になるかも、の好奇心を大切に。

選評

坊城 俊樹 選

- 立子忌や関東女雛右に座す
(辰野町) 矢島あさ子
- 山笑ふ幼馴染みに囲まれて
(松本市) 久我 綺乃
- 鳥雲に手持の磁石北を指す
(長野市) 松本 宏要
- 玲瓏と北信五岳春空へ
(飯綱町) 小林 紀子
- 春立つや無理やり感のあるヒール
(東京都練馬区) ヒマラヤで平謝り
- うつとりと熟れゆく風よ初花よ
(長野市) 武田 芳子
- 臍と共に密かな闇にをり
(箕輪町) 向山 政俊
- 拭き直し見るも鏡にある余寒
(長野市) 西本 ゆき
- 練群来七十年の時を経て
(塩尻市) 長 三枝子
- 燃り紙めて針穴へ糸春日影
(長野市) 坂口 智弘
- 佳作
女教師の袴にすがる卒業児
(松本市) 中村 百仙
- あれこれのなんだかんだと冴返る
(佐久市) 神津 武士

一句目、立子忌は虚子の娘である星野立子の忌日。3月3日であるから「雛の忌」とも。彼女は鎌倉在住だったから女雛は向って右に座す。季題の髻旋も全ての確な句。二句目、ある春の日に地元の幼馴染みに囲まれた里山のことか。むろんその山自身も彼らと同じ同胞として笑っている。三句目、春には渡り鳥たちが北へ帰る。磁石はその方角の北を指している。この余韻こそが花鳥諷詠。

選評